議事録

第５回県立高等学校再編振興作業部会

日　時　平成２４年７月１８日（水）１３：３０～１６：３０
会　場　高知県教育センター本館　大研修室
出席者　尾原賢治会長、土居英一副会長、梅原俊男委員、川村泰夫委員、
下司眞由美委員、竹内信人委員、田邊裕貴委員、谷脇澄男委員、
中村光宏委員、中山美佳委員、中脇正人委員、橋本万里子委員、濱口知恵委員、
教育次長（中山）、高等学校課長（藤中）、高等学校課企画監（森本）、
特別支援教育課長（田中）、人権教育課長補佐（大西）、
高等学校課長補佐（小野、竹村）、高等学校課チーフ（竹﨑、高野、北村）、
高等学校課指導主事（５名）
欠席者　高月琴委員、正木敬造委員

１　開会
（１）　教育次長挨拶
（２）　日程説明、資料確認等
【配付資料】
①　次第
②　座席表
③　第５回県立高等学校再編振興検討委員会からの検討依頼事項
④　資料１　第５回県立高等学校再編振興作業部会　資料
⑤　第６回県立高等学校再編振興作業部会開催日程調査票

＜第５回県立高等学校再編振興検討委員会　資料＞
⑥　第５回県立高等学校再編振興検討委員会　資料

２　第４回県立高等学校再編振興作業部会の内容確認
（会　長）最初に、前回の作業部会の内容確認を行いたい。事務局から資料の説明をお願いする。
（高等学校課再編振興担当チーフ：以下チーフ）資料１－１の説明。
（会　長）前回の作業部会の内容について事務局から説明があったが意見はないか。
（委　員）意見なし。資料１－１を了承。

３　検討内容
（１）確認事項
①　第５回県立高等学校再編振興検討委員会の概要
（会　長）確認事項に進みたい。まず「①　第５回県立高等学校再編振興検討委員会の概要」について事務局から説明をお願いする。
（チーフ）資料１－２の説明。

（会　長）前回の検討委員会の内容について事務局から説明があったが意見はないか。

（委　員）意見なし。資料１－２を了承。

②　定時制・通信制についてのまとめ

（会　長）次に「②　定時制・通信制についてのまとめ」について事務局から説明をお願いする。

（チーフ）資料１－３の網掛け部分の追加について説明。

（会　長）定時制・通信制のまとめについて事務局から説明があったが意見はないか。

（委　員）検討委員会、作業部会、まとめの中で高知北高校のように多様な生徒を受け入れる学校の重要性が言われているが、時間があれば、今のような社会の現状の中で定時制の工業や商業の課程の必要性を検討いただければと思う。就職も非常に厳しい状況で、子どもたちはいくつかの試験を受けて社会に出ていくが、高知県であれば中学、高校、大学の３つの入試があり、その上に、就職という大きな試験があり大学入試よりも就職試験の方が難しい状況になりつつあるのではないか。工業や商業の中で学び直しの可能性を考えることは別として、中学校から入った段階で社会へ出ていくため本当にニーズに合った、中学生の希望に合った状態のカリキュラムなのかというところも考えてみたいと思う。どこかで時間があれば専門高校の定時制の必要性を検討し、必要があれば存続しないといけないが、今の状態の中で、さほど世の中や中学生にニーズがないのであればもう少し検討していく必要があるのではないか。

（会　長）委員としては、どちらの方向と考えているか。

（委　員）見直しても良いのではないかという方向で私自身は思うが、それは中学生のニーズや社会のニーズも大きな要素になってくると思う。就職し働きながら学ぶという時に、正規雇用というのは難しい状況でアルバイトだったり、ほとんど働かなかったりという状況もあるので、働きながら技術、技能を身に付けて社会に出ることへのニーズ、子どもたちが４年間やってきたことが、そこで花開く、認められるという部分がなければならない。高卒や進学を目指すということであれば高知北高校のような学校がもう１校あればすごく違うのかという気がしたので意見を述べた。

（会　長）委員の意見に対して何かないか。

（高等学校課企画監：以下企画監）先程の意見は重要と受け止めており、資料１－３の６ページの定時制（夜間部）のまとめの②にも、高知工業高校と高知東工業高校の職業系定時制高校が２校あり、再編の検討が必要であるということでまとめている。先程、委員から就職の件であるとか、定時制の内容について、そのニーズが高知北高校のようなニーズであれば、もっと増やしてという意見もいただいたので、これも加味していきたい。

（会　長）他に意見はないか。

（委　員）今ある多部制の学校は、多部制と言いながらも二部制となっているので、三部制の導入を積極的に考えていただきたい。不登校経験者や中途退学者、学習障害や発達障害、そういう生徒たちの行き場がないというのが現実だと思う。少し学力があって普通科高校全日制に入っても、やっていけない生徒もいるのではないかと考える。就労生徒が極端に少なくなっている現状もあるわけで、三部制を考えるときに教員の勤務体制もあると思うが、それ以外にもスクールカウンセラーとかキャリアカウンセラーに加えて、ソーシャルワーカー的な人材を配置していくのはどうか。具体的には言えないが、高知北高校は多部制単位制で、昼間、夜間、それから通信の課程があるが、前回も意見を出したが、ほぼ同等の規模で三部制の学校を高知市周辺に置き、大方高校の在り方などを考えてもらえないか。何とか高校で学びたいという生徒が多くいる現状なので、さらっとまとめていくというよりも積極的な三部制の導入を考えてもらいたい。

（会　長）意見が出たが、別紙の「第５回県立高等学校再編振興検討委員会からの検討依頼事項」を見ていただきたい。ここに「１三部制について」の検討依頼事項があるので意見をいただきたい。

（委　員）今の高知北高校の現状だが、昼間部、夜間部、通信制という二部制と通信制課程で、学校の雰囲気としては、うまく回っているという気がする。というのは、昼間部の生徒で、いろんなパターンがあるが学校に適応できない場合に、同じ学校の中に夜間部とか通信制があると一度は退学という形になるが、同じ敷地内にあることで、例えば退学して通信制に移った生徒と廊下ですれ違い昼間部の教員が声をかけるということができているので、退学は残念なことだが、安心して次の学びにつなげるという部分では、良い形で今は回っている。教員も生徒も安心して次のバトンにつなげている。教員の勤務体制という部分があったが、その部分では、きっちり３つに分かれているが同じ敷地内なので連携ができている。メリット、デメリットがあると思うが、メリットの部分をすごく感じている。

（会　長）高知北高校の昼間部では全員が６時間目まで授業を受けていないが、中芸高校と大方高校の昼間部では全員が６時間授業を受けている。県外の三部制というのは、午前、午後、夜間と自分のライフスタイルに合わせて、午前中に仕事して午後の部で勉強する、あるいは午前中のみ勉強するとか、自分の仕事などの時間帯に応じて学習できるというのが三部制の良さ。ところが、時間数が足らないということで、３年間では卒業できない。中芸高校や大方高校では全日制と同じく３年間で卒業できるような定時制ということで、全員が６時間授業を受けている。不登校の生徒にとって、６時間授業は大変ということで三部制もあると思う。しかし、教員の勤務体制の問題もあるし、実際に仕事をしながら定時制に通っている生徒はどのくらいいるのかという問題もある。三部制が本当に必要なのかというところで、他に意見はないか。

（委　員）三部制も午前、午後、夜間ということで所属する部は１つだが、お互い

に午前も午後も夜間も取れる、場合によっては通信も取れるということによって希望があれば３年で卒業できるというのが今の全国的な三部制の流れだと思う。学校によっては三部制でも制服を着用している学校もあるし、そうでないスタイルもある。様々なスタイルが選べるということでメリットがある。通信、夜間の在り方で就労生徒が全国的な調査で少なくなっている。今その割合が手元にないが高知県でも同じだと思う。また、現在では正規雇用はほとんどいない状況だろうし、私が以前、夜間部に勤めていたときも正規雇用の生徒はほとんどいなかった。そのような状況から考えると生徒の生活スタイルに合った状況を考えるチャンスがあれば、この機会に三部制ということを考えていただければと思う。今の高知北高校のスタイルは確立されているので、そこを三部制にすればという意見ではない。高知北高校がということではなく、新たな形で北高校のような規模で少し考える余地があれば是非そのようなことも考えていかないと、中学校を卒業してそれなりに働ける場所が確保されている状況があれば良いが、中学校を卒業してもなかなか働く場所もなく、宙ぶらりんになる生徒がいるわけで、その生徒たちが高知県やそれぞれの市町村に残って将来高知県を背負う若者になるためのシステムとして考えていければということである。

（会　長）保護者の方はどうか。

（委　員）保護者というよりは私的な意見になるが社会に出るためにはどうしてもある程度高校の状況に合わせないといけないと思っている。三部制でなくても例えば午前でないと行けない人がいれば通信制もあるので、そちらに行けるのではないか。社会に出るためには全部を子どもたちのニーズということでやってもただ甘えになるのではないか。厳しい言い方をすれば、本当に厳しい子どもたちはいるが、その子どもたちを高校が全部受けもつのかという気がする。違う支援とかもあるのではないか個人的にはそう思う。通信のことは良く分からないが、通信でも大学の通信教育だとスクーリングとかあるし高知県でやるのであれば、現実的には厳しいだろうが訪ねて行ってやるとか、通信で受けている子どもたちも何とか出てくるといったことをしないと結局社会に出ずにニートになるのではないかという気がする。

（会　長）他にないか。

（企画監）先程の定時制の就労のことだが、平成２３年度の定時制全体の就労割合は２９．５％で、高知北高校などの昼間部を除くと４８．７％になる。（正規・非正規を合わせた就労割合）

（会　長）資料１－３の５ページの網掛けのところに「三部制を検討し」とあるがどうするか。委員からは積極的にという意見と、あまりどうかという意見があったがどう取り扱うか。

（委　員）三部制に賛成の意見だ。新たな制度の中ならやっていけるという子どももかなりいるということであれば、そういった子どものニーズに応えていくのは大事なことだと思う。ただ一番大事なのは、そこで何を教えるかで、そういった子どもの学習歴や特性から言うと、しっかりとした社会性であると

か、進路保障とか、そういったことも合わせて中身がしっかりと伴うようなニーズに応えるといったところで三部制の意義が出てくるのではないかと思う。

（委　員）積極的に三部制と話したが、三部制も含めた形で現在の全日制と変わらない体制の中芸高校と大方高校の在り方を考えてもらいたい。

（会　長）それでは、５ページの網掛けのところだが、「三部制も含めて様々なニーズに応えられるシステムの検討が必要である。」としてまとめに入れるのではどうか。

（チーフ）作業部会でいただいた意見をまとめに入れていきたい。

（会　長）それでよいか。では次に行きたい。

③　全日制普通科・連携型中高一貫教育校についてのまとめ（案）

（会　長）次に「③　全日制普通科・連携型中高一貫教育校についてのまとめ」について事務局から説明をお願いする。

（チーフ）資料１－４の「まとめ」について説明。

（会　長）全日制普通科・連携型中高一貫教育校についてのまとめについて事務局から説明があったが意見はないか。

（委　員）まとめの中で⑪に「普通科に求めるのは上級学校への進学であることを十分に把握し、センター試験等に対応できる学力を身に付けさせる体制整備をする必要がある。」とある。体制や器を作ることも非常に大切なことだと思うが、要は出来た器の中にどういうものを入れて、どう花を開かせるかということも大きなことなので普通科を考えるには、統廃合や再編ということもあると思うが、どういうことをやっていくかという中身、教育論的なことも中に入ってこないと、これから高知県の普通科を含めた教育全体を考えるうえではちょっと物足りないのでないかという気がする。

　進学をするのに１日３時間は勉強しないといけないというが、その３時間何をするのか。３時間を有効に使うなら３時間という時間の勉強の仕方を決めるのではなく、今日は自分が何をするか、英語であれば２００くらいの単語を今日は書ききるぞ、という目標の方がもっと伸びるのではないかと思う。ただ時間に追われて勉強するというのが本当に成功する道なのか。

　あと気になるのが、サラリーマン社会に随分なってきたので、８時間仕事をするという人が多くなっている。８時間座れば仕事が終わりという考え方で良いのか、今日は何をするという仕事の方がもっと効率的で作業能率も上がるのではないか。それが６時間で終われば、２時間余裕が出るわけだから、有効に使えるのではないか。授業にしてもただ５０分とか６時間するというよりは、今日はこれをするということを生徒がはっきり認識する。６時間であれば６単位、１単位では２５～３０くらいテーマができるはずで、４単位であれば１００～１２０くらいのテーマができる。それをきちっとテーマに合わせて、生徒に認識させて授業をすることが、学校の授業を大切にする、基礎学力を定着させるということにつながっていくのではないか。ただ漠然

と５０分生徒が座り、教員も授業をするということで、ここに書いてあるようなことができるのか、実際にそういう形でやっていくことによって随分と違ってくるのではないか。ちょっと学校再編という部分とは違うが、これからの学校教育の在り方というか、高知県の教育をどういうふうにしていくかということも中身に花を添えながらでないと器だけというか体制だけというのはどうなのかという気がする。

それと就職と進学の両方に適応できる学校、普通科高校というのは、なかなか現実的には難しいのではないか、そういうキャッチフレーズというのはできない世の中になっているのではないか。とするとここに書いてあるように普通科に求められるのは進学ということだろうし、保護者の意見でも進学先、その先を見て学校を選ぶということが多くなってくる。それに普通科高校はどう期待に応えていくか、中身の方に検討を加えながら規模であったり学校の目標であったりということを考えていただければと思う。

（会　長）先程の意見だが、まとめの⑩にキャリア教育の取組が必要とあるが、そこには収まらないということか。今までもやってきているが、普通科でもキャリア教育を更に意識させてということか。専門学科では意識したいろいろな取組をやってきたが、普通科でも教科科目などの指導においてもキャリア教育を生徒により意識させるということで、先程の意見は⑩に入らないか。このまとめの中にどういう形で入れるのかというところだがどうか。

（委　員）まとめの中でどう入れるというつもりはなかった。⑫に「大学受験の学力も一定は必要だが、社会に出るとコミュニケーション能力が重要である。初めて出会う人とどのように接するかを高校時代に考えることも重要である。」とあるが、実際に学校生活とか家庭生活とか日々の営みの中で身に付けられるような授業の工夫とか家庭の工夫ということを始めなければ、これを一つの教科のような形で学校が取り組むのは難しい問題だと思う。社会自体が一体となって、地域も家庭も学校も一体となった高知のキャリア教育がなされるべきで、高校だけでできるものではなく、就学前から順番に積み重ねていって、１つの連携の中で完成しましょうというものでなくてはならない。高校の役割は確かにあるが、学校生活の中でやるべきことというのは、勉強だけではなく、勉強を通じていろいろなことが発信できると思う。そういう中身も大切に考えていきながらやっていかないと、というつもりで言わせてもらった。これから先の部分で教育論というか学校の中身のことを抜きにしていかれると、ちょっと現場の方に溝ができ、学校と考えたものとの差ができるということを思いながら言わせてもらった。

（会　長）それでは意見ということで良いか。

（企画監）言われるとおり、書いてあるだけをやるのではなく中身がついていかないと、本当に関わったことにならないので、そこは報告書などでは考えないといけない。委員の発言は、年間指導計画をはっきりして、その中にしっかりとプログラムを組んで意志を示しなさいということではないかと思う。そこは再編振興という部分では深く入りすぎるということもあるので、そうい

う意識はあるということを踏まえたうえで枠組みとか考えていきたいと思う。意見は記録しておく。

（会　長）よろしくお願いする。１時間程経過したので休憩としたい。

（休憩）

（２）協議事項

① 総合学科の在り方について

② 併設型中高一貫教育校について

① 総合学科の在り方について

（会　長）それでは、協議事項の「①総合学科の在り方について」について事務局から説明を願う。

（チーフ）「資料２　第５回県立高等学校再編振興検討委員会Ｐ１からＰ３」の説明。

（会　長）　説明についての質問はないか。

（委　員）　なし。

（会　長）　質問があれば、その都度聞いていただく。検討依頼事項「２　総合学科について」を中心に協議を進めていく。順番を変えて（２）から協議する。「生徒の進路に関する多様なニーズに応える取組に対し、先生方はどのような認識をもっているか意見を聞きたい。」ということだが、依頼内容についてもう少し具体的に説明をお願いしたい。

（チーフ）総合学科に関わりをもっておられる委員がこの中にいらっしゃるので、生徒の将来の進路に向けた学校の取組等を話していただき、それに対してどのような考えを皆さんがおもちかということを聞きたい。具体の取組例を出していただけたらと思う。

（会　長）総合学科で勤務する教員がどのような意識をもって取り組んでいるのかということではないのか。先生方というのは委員のことを指しているのか。

（チーフ）それも含めてということでお願いしたい。

（委　員）総合学科は須崎高校、室戸高校の２校で経験し、現在も室戸高校で勤務している。生徒の進路に関する多様なニーズというのは、その通りである。ほとんどの学校は多様な進路希望をもっている子どもたちが入ってきている。いろいろな希望をもった状態で総合学科特有の「産業社会と人間」という週２時間の授業があり、その中で生徒は将来のことを考えたり、あるいは、専門学校や大学等を訪問したりして自分の将来を考え、室戸高校であれば、福祉、工業、商業系といった系列（コースと考えてもらったらよいが）を選んでいく。多様な希望なので先生方はしんどいと思う。普通科の進学高校であれば大学進学がほとんどであるし、職業科（専門科）高校であれば、進学するとしても例えば工学系といったように、ある程度的を絞った指導ができるのではないかと思うが、総合学科では幅が広いので大変である。須崎高校

にいるときに、進学実績が振るわなかった時期のことについて、振るわなかった理由を、以前勤務された先生にお聞きしたことがある。大学進学に関して言えば進学指導というのは、団体戦みたいなものである。クラスが一丸となって大学進学を目指すようなところであれば、ホーム主任の経営で何とかなる。一方、総合学科は国公立大学から専門学校、就職など多様な進路希望をもっており、しかもひとつにまとまって授業を受けていない中で、そういう生徒たちをまとめて指導していく学級経営は大変である。そのために、大学進学に関しては振るわなかった。ただし、生徒たちの興味関心をもった進路についてはそれぞれ実現していったという話を聞いた。（２）に関しては、総合学科の先生方も大変な中で頑張っているのが現状だと思う。須崎高校ではそれは大変だということで本来の総合学科の理念とは違うが、系列ごと、進路希望別のホームを編成するという手段をとっているところもある。室戸高校に関しては、３クラスあり、大学進学希望に関しては１つのクラスにまとめているが、福祉や工業、商業あるいは生活デザインの系列に関しては突っ込みで２クラス編成をしている。須崎高校のような系列ごとのクラス編成をしている学校から室戸高校のような学校に変わってくると、複数の系列がある中で学級経営するのは大変であるだろうなと思っている。室戸高校の担任の先生は夜遅くまで働いている。

（会　長）　私も室戸高校で校長をしていた。例えは悪いが、給食に例えると、普通科は定食である。みそ汁もあり、きちんと栄養の整ったものを毎日いやでも皆が食べる。ところが、総合学科はバイキングであるので自分の好きなものを自由に取って食べることができる。好き嫌いがあるので栄養が偏る者が出てくる。普通科に比べると栄養という面で心配な生徒が出てくる。ただ、栄養士がいて、「産業社会と人間」という栄養学の本があり、それを参考にしながら栄養士が指導して偏りがないようにバイキングで食べさせるという仕組みである。栄養士がうまく機能しないとなると、そのまま偏ったままで３年間過ごして栄養不足で卒業する。普通科は否が応でも定食を毎日食べるのである程度の栄養が皆に身に付く。総合学科の栄養士になる先生は、普通は１年生の担任で、室戸高校は２人担任制である。総合学科のほとんどが２人担任制をとっている。１年生の時に学ぶ「産業社会と人間」では、自分の適性などを知ったり、職業探しをしたりプレゼンテーション能力を身に付けたりということ等をやっている。手間暇がかかるので総合学科に勤めている先生は大変である。科目選択の時も栄養士がうまく機能しないととんでもないことになり、先程も言ったように偏った栄養のままで卒業するといったことになる。

（委　員）保護者の立場での認識という発言になるが、総合学科は大変分かりにくい学科である。資料にでている成果や課題、校長先生からの現状と対応を見ると、保護者という文字が何もない。保護者への対応、説明あるいは、ＰＴＡと学校とが一体となって子どもたちのことをどんなふうに指導しているのかといった意見が全然入っていないというのはショックである。多様な系

列があって学べる場があるというのはとても良いことだが、中学校を卒業したばかりの子どもたちに、それがどれだけ具体的に受け止められて、自分の将来として考えることができるのか親は不安に思っている。やはり子どもと相談しながら、子どもが学校でどんな説明を受けて、どういう系列を選ぶのかということを親とともに進んでいかないと中途半端な選択になって、後で悔やんだり、保護者からの不満もでてきたりして協力が得られなくなりかねない。もう少し親を巻き込むような視点の取組がどこかにないかなと不安に思う。

（会　長）その意見も踏まえて（３）の成果と課題はないか。

（委　員）分かりにくいというご指摘があったが、その通りである。須崎高校、室戸高校に勤務していて、中学生向け保護者向けに説明会を開くが、総合学科はこうだと説明しても、具体的にどうかといわれると難しいところがある。ある意味、総合学科の宿命だと思う。平成６年度からできたが、３年前の平成３年度の中央教育審議会という教育を検討する組織の答申で、総合学科は「従来の普通科ではない」、「従来の職業科でもない」と否定形で表されている。具体的にこんな学校だということでスタートした学科ではない。多様な学校をいくつか挙げると分かりやすいと思うが、全国の総合学科をリードしている高校に、埼玉県の「筑波大学附属坂戸高校」がある。この学校はもと農業高校である。筑波大学附属の農業高校であったが、１９９０年代、生徒が農業科を受けてくれなくなり生徒数が少ない中で何とか学校を活性化させようと総合学科が利用された。農業高校から生徒たちを集めて１年生の時に農業の魅力などを知らせて農業のコースに進んでもらおうという学校が増えてきた。四国でも愛媛大学農学部の附属の農業高校であったが、ここも生徒が集まらなくなり、総合学科を作ろうというふうになった。このように農業高校が生徒を集めるためにも利用できる学科である。あるいは、大阪府に今宮高校というノーベル化学賞を受賞した福井謙一さんが卒業した伝統校があるが、私立高校がいっぱいあり、地盤沈下をしていく中で何とか進学実績を上げたいということで総合学科に変えたところもある。伝統校が進学実績を回復するために生徒にやる気を起こさせて、押し付けの時間割でなくて自由に自分の時間割を選んでやる気を出してもらうというのも総合学科である。また、進学校がさらに進学実績を上げるための総合学科もある。広島県にはトップリーダーハイスクールという、難関大学の進学実績を増やすことを目指した県が指定する高校が５校あるが、そのうちの２校が総合学科である。福山誠之館高等学校と尾道北高等学校である。他には、高校再編で総合学科を活用することが全国的に多い。平成１９年に新潟県の高校改革を調査に行かせてもらったが、新潟県でも高校再編で総合学科を活用している。地方の農業高校と工業高校をくっつけて総合学科にしたり、あるいは、佐渡島の農業高校と隣接する他の高校の商業科や電子科等をくっつけて総合学科にしたりといったような具合である。このように総合学科と言ってもいろいろあるので総合学科がこうだというよりは、具体的に室戸高校はこういう

学校です、高知東高校はこういう学校です、そしてそれぞれの学校に思いがあって取り組んできて今成果が出ているということになる。高知園芸高校はある程度人を集めていたと思うが、春野高校の先生にお聞きすると、従来の農業高校よりは幅広い勉強ができるということで以前は地元の春野中学校からはあまりきてくれなかったが、今ではある程度きてくれ、多くの志願者がある。高知東高校も総合学科ができたときは多くの生徒を集めている。室戸高校は、いろいろな経緯があって総合学科になったが、少なくとも今は、普通科の時と比べて工業の機械が勉強できるようになり福祉も勉強できるようになっている。あと商業系列やＩＴデザインもあるので簿記会計が学べる一方、コンピュータも学べるなど幅広くなっている。制度が変わってなくなるが国家試験の介護福祉士の受験資格をもって合格している子どもも出ている。先日、学力向上の会があって総合学科のグループで話したことだが、須崎高校や宿毛高校、室戸高校というのは地域の学校なので、総合学科だからということで入学を希望しているというわけではないというところがある。だから絶対に総合学科でないといけないかというと微妙だが、少なくとも幅広い選択を選べるということになっているので、学校を選べない郡部の学校については、幅広い分野を少人数で学べる総合学科は意味のある学校ではないかと思う。

（会　長）（１）も入ってきている。生徒が少なくなってきている中で多様な選択科目を維持することができるのかということがある。生徒が少なくなると科目選択の際、少人数になり、講座が成立しないことがある。総合学科本来の多様な科目を選択させるといったことが不可能になる。今後の存続の意義も含めて（１）から（３）まで意見を出していただきたい。中学校から見て総合学科はどういうふうに映っているか。

（委　員）先程、委員からのお話にもあったように、中学校卒業時に総合学科のことを非常に理解しているかといえば疑問である。ずっと言われているキャリア教育の一環のもとに小中高で具体的な自分のキャリアイメージをもって、この前の検討委員会でお話が出ていたように学びのスイッチが入って勉強を主体的にするという姿勢を中学校で培っていかなければならないなと感じている。小中高の長いスパンでとらえたキャリア教育を充実させていくことによって総合学科である高等学校に入って「産業社会と人間」でしっかり基礎を培った上に２、３年と自分の好きな自分の求める教科を主体的に選択していくことが可能になってくるのではないかと思う。

（会　長）存続の意義は何であるかという厳しいことを聞かれている。定員を満たしているのは高知東高校と春野高校である。

（委　員）存続の意義を強調したい。室戸高校では、室戸には大きな機械関係の会社があり多くの卒業生が入っている。福祉施設もあるので地域の産業に関係した教育課程が柔軟な総合学科などは地域の人たちの希望に添うことができる。須崎高校はどちらかというと進学に力を入れている総合学科である。須崎高校のホームページに学校案内があり、窪川中学校出身のある卒業生が

メッセージを出している。この生徒は神戸大学法学部に合格した子どもである。次のように書いている。

「私は高校選択のときには通学時間などを考慮し須崎高校を選びましたが、難関大を目指すなら市内の高校でないと無理だという不安も感じていました。確かに、須崎高校には多様な進路を目指す生徒が集まるので、全体での進学への取組は市内の進学校に比べると弱いかもしれません。しかし、その分、長時間相談に乗ってもらえたり個人指導を受けたりできるおかげで、私は自分の目標に寄り添った勉強ができ、希望の進路を実現できました。自分のことを気にかけいつでも支えてくれる先生がいるというのは本当に心強いことだし、私の友達にも先生からそれぞれの受験に合わせたアドバイスをもらって志望校に合格した人がたくさんいます。」この生徒は非常に優秀で頑張ったが、受験勉強に少し出遅れた。総合学科は非常に柔軟で少人数の講座があるので、例えば週２時間の課題研究で数学研究という講座があり数名で講座が成り立ち、自分に合ったレベルとスピードで主体的に学ぶことができ、また少人数授業の利点を生かして先生から個別に指導を受けることができる。それぞれの進路希望に添った時間割ができるので、出遅れたが塾や予備校にいかないで成績を上げる利点も総合学科にはある。一人一人の進路希望に添った教育課程ができやすい総合学科というのは大きな意義のあるところである。

（会　長）そもそも総合学科は普通科に大学進学を目指して入ったけれども明確な目的意識もなく大学に行って就職しないままでいるとか、逆に専門高校に入ったけれども大学に行きたいと途中で気付いたというような、その両方の場合に対応できるのが総合学科ということで理想的には本当は素晴らしい学科である。ただ、うまく機能できていないこともあるので課題として出ている。理念的には理想的な学科である。入学してからも「産業社会と人間」という科目を通して進路が決められる。ただ、実際には、「産業社会と人間」が終わらないうちに科目選択をしなければならないという矛盾もあるので対処していかねばならない。

（企画監）生徒数に関する意見に対して答えたい。前回の資料２　Ｐ４に総合学科についての入学定員に対する充足率を平成１５年度と平成２４年度とを記載しているので参考にしてもらいたい。

　充足率だけを見た場合は、春野高校については平成１５年度は改編前であり比較ができないが、高知東高校以外の総合学科高校でポイントを下げている。

（会　長）充足率に関しては、全体の生徒数が減少しているので参考にならない。充足率の過去との比較だけで総合学科を判断できない。しかし、充足率が低くなっているのは事実である。

（委　員）前回の意見でもあったが、生徒数は高知市に集中している。高知市の高校は、普通科であれ、総合学科であれ、充足率は高くなるのは当然である。充足率については、総合学科であるから低くなっているとの議論にはならな

い。室戸高校、須崎高校、宿毛高校を設置する東部や西部地域の生徒数はここ１０年で大幅に減少している。

１０年、２０年後生徒数が減れば、総合学科の特徴である多様な科目選択をどう維持するか、また、教員定数の関係より多様な選択科目を教える教員数が足りるのかなど、生徒数に関わって色々な問題が出てくるのではないか。そのためには、総合学科を維持するためにはどのようにしていくか。また、維持するために周辺校とどのような関わりをしていくか。生徒数が減っていくなかで、総合学科だけでなく、普通科及び専門学科も学校規模を考えていかなければならない。総合学科１校の存続を考えていく問題ではなく、周辺校も含めて考えていく問題であると思う。

（会　長）欠席委員の総合学科に対する意見の紹介。

「進学を目指す生徒、就職を目指す生徒等、さまざまな進路のニーズに応えることができるシステムでということは分かっているが、保護者も含めてぼんやりとしてしか分かっていない部分もある。

例えば、生徒が自分でカリキュラムを組むということだが、実際に生徒の進路希望にあった適切なカリキュラムが組めているのか、サポートが十分にできているのか。総合学科で学ぶために、中学校でどのような力を付けておいたらよいのかなど、これまで以上に中学校と高等学校の情報交換が必要であると思う。」

総合学科は分かりづらい学科である。そのため、中学校やその保護者に高校側から情報を今まで以上に発信していく必要がある。

② 併設型中高一貫教育校の在り方について

（チーフ）併設型中高一貫教育校について、資料２　Ｐ４～８の説明。

（会　長）検討委員会からの検討依頼事項３（１）について話をしていきたい。

国公立大学への進学者数は、資料２　Ｐ１８が記載されているので参考にしてもらいたい。３校とも併設型中学入学生１期生が高校卒業年度に当たる平成１９年度を境に進学者数も増えている。国公立大学進学状況だけを見ても進学実績は上がっているので、地域の進学に対する期待に応えていると思う。しかし、本校は志願者数の増加に結び付いていない。

（委　員）安芸中高校には、素晴らしい先生がいてハイレベルな授業を行っている。また、学習面以外でも地域の観光案内などにも取り組んでおり、非常にバランスの良い学校だと思っている。しかし、一般の方々には、これらの取組が伝わっていない。

香南市の中学生で、大学進学を希望している生徒は、高知市の高校に進学している現状がある。また、公共交通機関を利用した場合、安芸市方面は高知市方面に比べて運賃が高い傾向にある。このこともネックになっているのではないか。

また、安芸高校と中村高校の１クラスぐらいは進学エリートクラスになってもらいたいと思う。子どもの将来を考えると、進学を意識した学校運営も

必要になる。安芸高校と中村高校は、より進学実績を伸ばし、進学を意識した学校運営をしてもらいたい。高知南高校については、高知市には私立学校があるので進学を特に意識した学校でなくてもかまわないと思う。

（会　長）検討依頼事項（１）（４）を同時に検討していきたい。公立中学校の入学者選抜は、国の規定により適性検査のみで学力検査ができない。一方、私立校は、学力検査を行い学力重視で選考している。

また、教科の前倒し学習（中学生段階で、高校生の学習範囲を学習すること）は、私立校はやっているが、公立校ではやりにくい面がある。

公立校では、中学１年から高校３年までの６年間で、ゆとりをもち計画的に生徒一人一人の個性を見極め、豊かな人間性を育み、社会性の育成をしている。この点では、私立校とは違った良さであり、特色である。

しかしながら、課題もある。中学３年生で、入試がないので中だるみ傾向がある。そのため、本校では、進級診断テストというものを３回行って緊張感をもたしている。

中等教育学校があれば、併設型中高一貫校より６年間計画的な学校運営ができる。中等教育学校の視点も入れてほしい。

（委　員）市町村の中学校や教育委員会にとって、併設型中高一貫教育校は邪魔な存在ではないか。

他県では、受験エリート高校をつくって進学実績をあげている学校もある。公立の併設型中高一貫教育校の意義を高めるためには次のような学校ができても良いと考える。大学進学希望者を中学校から集め進学実績を上げる学校、学び直しを前面に打ち出し、小学校の学習でつまずいた子どもたちを６年間で成長させる学校、など特色を出していけばよい。

（委　員）南国市なので中高の一貫教育校についての影響はあまりない。安芸、中村と距離があり、高知南についても数からいうとあまり影響はない。ただ、これからのことを考えると影響を受けるだろうというところもある。南国市もいくつかの学校で生徒数が少なくなっている。中高一貫教育校の６年間を見据えたゆとりある教育課程が実施される中で、例えば、小さくなってきている学校では部活動が実施できない状況が出てきている。県立高知南中学校などに行くと自分のやりたい部活動があるということで、今後生徒数が減るに従ってそういう影響を受けるのではないかと考える。

（副会長）小学校から中学校へ進む段階で市立中学校へ進まない子どもの割合は、県立高知南中学校ができた時点で４ポイント上がった。それまで２５～２６％であったが、３０％くらいになった。４ポイントというのは市全体ではそれほど大きな割合ではないかもしれないが、中学生なので通学区域があり、県立高知南中学校に近い中学校は大きな影響を受ける状況が出てきた。ただ、子どもたちの様子を見ていて、一つの選択肢が増えたことは間違いない。小学生からすると私学へ行ったり、受験をしようとしたりすると相当負担がかかることは間違いない。そうした中で中高一貫という県立高知南中学校の存在は、もう少しゆとりをもちながら、自分なりの進路を選択できると

いうことで選択肢が増えたという面はある。確かに入学後のいろいろな事象もあったが、落ち着いた学校の状態になりながら、県立高知南中学校としていい面も出してきてもらっていると思う。

（会　長）特に東部などは人数的に、県立中学校に生徒が流れ、市町村立中学校の人数が減るということで、学校運営がやりにくいという意見もあるが、互いに切磋琢磨しながら、いい意味で競争しながらやっていければと思う。安芸市内の中学校は現在は落ち着いたいい状態になっている。

（委　員）（１）のところだが、法的な縛りがあって受験エリート校を目指せないとのことであったが、中村高等学校については、単独の高校であった時から地域の人にとっては幡多地区の進学校という強い思いがあり、今でもあると思う。それを無視して進学校ではないなどとは言えない。そういう親の希望や期待は大きいと思うし、今もそうだと思う。（中村高等学校の）今年の進学の実績も上がっており、先生方も頑張っているという印象である。ただ、そういうのを自然の流れとしてとらえるのではなくて、もう少し主体的に幡多地区の進学校として位置付けをしていったらと思う。

（会　長）受験エリート校というのは、どういう学校を指すのか。当然我々も進学に対しては生徒の希望を達成するために努力して、その結果として難関大学も含め、大学進学者が増える。それはエリート校ではないと言われると困る。

（企画監）受験エリート校ではないということが進学を否定するものではなく、当然地域のニーズがあればそれに対応しなければならない。その結果進学が伸びているというのは、決してその進学を否定するものではないところだと考えている。当然中高一貫教育を導入した時に受験エリート校ではないと書いているが、３の（１）のように大学への進学に対する対応はすることと書いているので、進学を否定するものではないということを確認しておきたい。

（会　長）　それでは、先に（２）と（３）を済ませたい。（２）だが県立中学校は女子が多いということで、実際本校も他の２校も女子が多い。このデータはないか。

（企画監）平成２４年度でいうと、高知南中学校は女子の割合が７３．３％、中村中学校が７０．４％、安芸中学校が６５％。平成２３年度では、高知南中学校が６０．８％、中村中学校が５６．３％、安芸中学校が６０．３％という現状である。

（会　長）この理由について小学校の校長に聞いたことがあるが、一つは、この年代の子どもは精神年齢が女子の方が２～３歳上であるとのことである。作文などを書かせると歴然としている。ただ、受ける段階から女子が多い。県立中学校へ行くとやはり、かなり勉強しなければならないというイメージもあり、女子の方が成績もよいということで県立中学校へ行こうということになるようである。男子の上位層は私立に抜けるが、他はほとんどが今まで一緒に地域のクラブでやってきて、市立中学校でも一緒にやろうという子どもが多いようである。県立安芸の場合は、高校の段階で男子の外進生が多く、男女差はかなり、解消される。高知南高等学校などでは体育等で困るという話

も聞いている。

（高等学校課学校教育企画担当チーフ：以下企画チーフ）男女比については当初願書にも男女の欄はなかった。平成２０年の高校教育問題検討委員会で検討して男女の欄を設けるということが決まった。受験エリート校についてもそうだが、全国的な流れでも過度な受験競争につながるような、例えば他県は県立校が進学トップ校であり、それを併設型にすることによって過度の受験競争になることを懸念したものであり、あるいはその中で平等性ということを非常に強く言われていたために、男女についても全く情報がないまま平成１９年度までは選考していた状態で、ようやく願書に男女の欄を設けるようになったという背景がある。もうひとつ補足すると第３の選択肢というところが大きい。つまり小学校の中で人間関係が悪くなった、あるいはいじめる子といじめられる子の関係が私立と県立があることで解消できるというところは大きいところである。また、先程会長から出ていたが、女子の方が地元志向が強いということで、女子が多いということの一因にはなる。

（会　長）これについては県外で、入学段階で男子を多く入れるなどの制度はあるか。

（企画チーフ）他県では５県くらいで制限がある。例えば東京では５０％、その他の県ではどちらかの性が６割を超えない等はある。

（会　長）あまりにもいびつな比になると、特に体育などやりにくくなってくるということで、制度的な部分で事務局で検討してもらえばと思う。今のところ自分の学校ではそれほど大きな問題にはなっていない。

（企画監）中村高等学校と四万十市教育委員会に聴き取りに行ったが、委員が言われたように、幡多では中村高校のステータスが高く、男子は一度県外へ出てもという考えもあるが、女子は保護者も含め、大学はどこへ進学するかということよりも、中村高校を卒業するということが重要であるという意識があるとのことである。そうすると中学校の段階から県立中学校に入っていれば中村高校を卒業することができるということで、女子の方が志願の割合が高いということである。受検者についても男子が少ないということがあり、枠を制限しても逆にそれが負担になる可能性もある。例えば、１００人募集があって４０人とるとすると、適性検査等いろんな面で４０人とれる状態の受検生がいるか。枠を作ることで負担になるかもしれないとの聞き取りをしている。

（会　長）この件はこれで良いか。では次の（３）の中高合同の学力検討会や合同の教科会の開催によって、教職員が同じ認識をもって生徒に関わることはどのような効果があるか意見を聞きたいとのことだが、中高一貫教育校のメリットとして高校の先生が中学校で教える（中学校の教員が高校で教えることはあまりないが）という相互乗り入れがある。そうすることで、免許外授業を行うことがほとんどない。市町村立の中学校では美術の教員が数学を教えなければならないというようなこともあるが、県立ではまずない。中高一貫教育校には専門の教員でできるというメリットがある。会を一緒にやると義

務の先生は非常に丁寧で気配りができる。指導案の書き方もきっちりしている。高校の教員はそういったところが不得手であり、合同でやるとそれが良く分かる。逆に、高校は専門性が強いので中学校の先生が高校の授業を見ると勉強になる。中高一貫教育校は指導の連続性があり、中学校から高校に上がってきたとき、中学校の先生が高校生に声掛けをしたり、高校の先生が中学校で教えた生徒に声掛けをしたりできる。導入当初はぎくしゃくしたらしいが、中高互いのいい面をみることができるということでメリットがある。存続の意義といったことでもかまわないが、その他意見はないか。

（企画監）資料６の併設型中高一貫教育校の基礎資料２だが、安芸中学校関係と中村中学校関係の平成１３年から平成２３年までの小学校６年生の卒業者数を書いている。その一つ下に小６が９３３人とあるがこれが平成２４年度の卒業生となって、小５がその次となってくる。今の小１は東部学区では８００人である。この８００人には、香南市、香美市が入っている。香南市、香美市を除くと小１は３１８人となる。これで考えると県立安芸中学校の運営上の課題がある。逆に市町村立中学校からするとかなりの生徒が減ること、また県立中学校に女子が多いということは、市町村立中学校には男子が多いということになる。これは中村でも同じである。このことについても御意見をいただければと思う。

（会　長）先程の事務局からの説明に意見はないか。なかなか意見を出しにくいところもあるが。

（企画監）結果をどうするかは難しいかもしれない。市町村立中学校や市町村教育委員会への配慮は当然必要かとも思いその点確認できたらと思う。

（会　長）これについては市町村立中学校の合併などもあって、合併していってどうなるかといったようなことも含めて考えていかなければと思う。

（副会長）児童数減は明らかで、これから先間違いなく減っていく。その中でこれから先同じ定員であれば影響は大きくなってくる。そのことと存続云々の議論は難しい。今日の議論を聞いていると、総合学科にしろ併設型にしろ保護者は何を考えているかというと高校卒業時の進路先はどうなのかということがメインにある。総合学科というのは多種多様な子どものニーズに応えるために教育課程を組んでいるがいま一つフィットしていない部分が課題になっている。中高一貫にしても子どもによっては６年間でつながった方がよい子どももいれば、３年―３年で受験があった方がよい子もいる。そういう意味で選択肢が増えた方がよいと言ったのであり、そのことを超えて児童数が減るからということでの議論には入りにくいというのが正直なところである。

（委　員）ある公立中学校の校長から伺った話であるが、県立や私立に女子が多く進学するため、男子の生徒数の方が多くなっているとのことである。グループ学習等の際には女子が男子と同数いた方が活発になる傾向があるので、授業の面で若干支障があり配慮しているということを聞いたことがある。

（会　長）安芸は女子が活発な傾向がある。他に併設型中高一貫教育校について意

見はないか。その他なければ以上で協議を終了したい。

＜（３） その他＞　なし

４　閉会

（１）閉会挨拶（企画監）

（２）次回開催日程の確認

（３）諸連絡